民間格致問答　一

二 叙1
131
1

文久二年壬戌三月官許

大庭雪齋譯本

民間格致問答

思無邪齋藏

門 二 1
號
巻

多
100
1

序

[illegible]

とちはるフォルクスナチュルキュンデといへる
書なりけり阿蘭ことのはなる法
いろはにうつしかふるなり
此この儒書かの國人にしめす
ほしとて此御國人のたやすく
よみうべくもあらねば書とす大旭

あるしうちのぬさきの隠士のぬしこそは
しきりにこふに和蘭此御國
の人とひとしくこゝろうべき
書とも見えざめれバに是ある
ふみみなみまほしと思ふ者は
てにをはしかへてぞのきこえける

[illegible]

○題言

一此書ハ和蘭陀國ニて「ヲルクスナチュールキュンデ」と名け問答體ニ編て村野の土民に教る理學の書を譯せるなり近年彼國大ニ文明ニなりて士分の者ハ大抵諸藝の學を知ざる者なし是におゐて無知の土民をも導て才智を開かしめんと思ふ國王の仁心ニて諸藝勸進の文社官ニ命じ眼前ニ發現る諸事諸物の道理を説て土民を導くべき書を捧る者ニハ賞金を與へんと國中ニ行令しむ此時數輩の學師各一本を編成て捧たるを文社官ニて之を撰び論理文章ともニ抜群なりと稱譽て此本

と出板し國民に與へにけり今我　邦には是等の道理
學問いまだ一般行はれざれば士農工商ともに見も聞も慣
ぬ事の様にて容易は解難かるべければ余をまさ
命を蒙るまゝに己が不才を顧ず俗言にて譯になり。
されバ物の道理は些少にても言の端てにをはの聞や
うにてとらぬ様に悟ること多し況奥深き道理は彼此
混合て悟り難きものなれバ此書の如き眼前の事を諭
せるも能々氣を付て讀べし凡書物にては如何に詳か
に説示しさりとも言の色彩五言の上り下りの記標も
なければ口傳の様に定かにもあらば然るを一通に讀

思無邪齋藏

て解らぬと云捨るは詮なし只工夫をこらして幾へん
もく操返し讀バ自と前後の道理の味も志れ不思議な
る天地の事をも悟らるべし

一文面の言ざまは賤しけれども事の道理は賤しからね
バ世の玩びの戯作物の様に蹴かにせバ大切にして讀
べし彼國にては子生れて六七歳になれバ十二三歳ま
で仁義五常の道を教へ或は算學地理學を習させ十三
四歳より十六七歳まで學校に入て此書の如き萬有學
を學しむ故に六七歳の童子には早くいろは假名を習
せ朝夕間に讀教へて事の道理を漸々に諭せは幼少よ

り才智開けて自と文字の義理も志り高上なる漢書を學ぶ時の助けともなるべし又親たる者ハ其身の課業と定め朝夕其子ニ讀教れバ事の道理いよ〱明ニなりて經世日用の事にも弁利の事のみ考へ出て無益ニ人力金銀を費すことなかるべし返〱も書を讀時ハ如何程平易き書物たりとも能氣を付て道理の意味の心よう〱しく覺るまで工夫をこらすべし若些少も解難きことあらバ然るべき人ニも問尋ぬべし人ニ問ことを恥て臆案ニ任せ置バ假令天性鋭敏人なりとも道理の根本間違ひて生涯同様の才智ニて暮ん事なり兎角ニ學問讀書ハ才智を増さめのものなれバ彼此ニ心をとむべし

一晝夜を二十四時としその時の六十分一を密扭篤といひ又その六十分一を施昆度と云又會爾ハ我念佛曲尺三尺三寸ニ當るその十分一を把爾牟といひ把爾牟を十分して兌毋といひ兌毋を十分して私多列比と云又弗多ハ一尺許ニ當り里ハ我九町八間一尺二寸四分余ニ當る又封度ハ把爾牟立方蒸餾水の秤量ニて二百六十八錢三分三厘三毛强ニ當る穩斯ハその十分一ニして羅獨ハ又その十分一なり

思無邪齋藏

一和漢ニ物體ハ有ても名のなき物ハ譯べき言なし故ニ喩バ素質と譯て傍ニ「ストフ」と記せるが如きハ些少ハ字義ニも由ど彼の邦の「ストフ」と云名を其侭ニて譯せるなり又剥林越列幾の如く字義ニもよらバ其侭の名を目的ニして譯せるもあり如何なる物と云ことハ論の序ニて悟るべし只譯文の拙きハ不才不學の筆ニ罪あきハ看人願くハ紓なひて事の道理のミを採用ひなへがし

文久元年辛酉六月

大庭恣 誌

思無邪齋藏

民間格致問答巻之一

千八百三十一年發行

西肥佐嘉　大庭恣　景徳　譯

○發端

○茲ニ童稚の時より格致の學問ニ身を委さる人ありけるが終ニハ樂ミ多き村荘ニ年月を送りけり此村荘ニて殊ニ此人に樂ミとなる事ハ無術文盲の者を教導くことふして村民の才智ニて及び難かりんと見ゆる萬有學をさへ或時ハ通常の説話ニして教へ又或時ハ學舛の者に讀しむる書物ニて教ふけり其教を受る手相の中ニ「トイ

ンマ江ン〈庭園を業とせる土民の名〉と云者も亦ありけり此男ハ工夫事にハ不分別にもあらねど事の道理ハ全く不會得にもあらざりけれども甚しき迷ひ信者の父母に育られて常に彼此萬有の外と見ゆる事のミ見出し信仰詰にて地主の祖那を苦しむるミ度々なりき然るに始終此迷ひ信者と争闘したる祖那ハ此男にも萬有の學問を知せまさ萬有學の名ハで著しき萬有の作用をも領會せしめ得るか得ぬかと自試ミん爲の課業を立まさ此萬有學にて數量るさ現象の原因を知しむる而已ならば始終の處で一度ハ此男の萬有の外と見る想像も凝固りたる迷ひ信仰の愚癡

思無邪齋藏

なることも根本から癒さんとまでを己が課業と決定しさる折こそあれ次の話にて好序を出来にける

「トイヱマン」「旦那私ハモウ動輙ば彼此不思議なる事の道理などかゝを尋問いたして始終マア勝手自侭なりを申しはした益衰の方の車造りで又事か出来ましてござる此事ハ當然る事よでハ私ハ信用まべき事と思ひませる

「旦那ホ番頭か何で出来さかいチヨツト聞せてさいカ恐くハまさ取に足事でハあるまい度々乃公が論判して控き付さ操る例の馬鹿な事ておらう汝が極當然る事よば萬有の外とするとハ數度のことでキツト乃公が知てお

る「トイン」旦那アノ職人共が新き軸材を車に嵌入とつたるハ尊主も知てござるかナア軸材の中央の最大處まで軸穴に串徹を為にハ御山な装置がござりまれそれがツノ軸材に縄を結着て其縄の上ハ高材に引掛て牽揚る檣車でもつて甚骨折て出来る事でござりまれが昨日の夕方までに大骨折をして一分か二分か殆と云程までに成付ましたる時に職人が日を暮さものじやに依て何もかも其形にして今朝まで置ましたサア是から先が中く容易に果敢取ぬ様に成て業がそれ丈ケ困難く成てをりましたトコロ何事が發現さうと申せバ今朝職人が業に来

思無邪齋藏

た時分にハ誰ぞ加勢した人があつたと云徴もなしに檣車がツノ軸材を十分穴に嵌入でをりました加勢した者がないと云證據にハ縄も軸材に結着て上から引張た形にてちやうど止置た時の様にしてをりましたナンド不思議な事でハござりませぬか「且何處が不思議なるかエヽ番頭ヨ汝の目にハ何處が不思議なるか當然にハ見えぬかが乃公が目にハ當然なるぞよ汝等の様な輩をバ怪ませハそれどもマア其様な事より當然なる事ハあるまいぞよ總て百千の現象ハ皆會得し難き者で萬有の作用に不學なる時ハ大抵ハ驚異をる天性の者であるぞいサレバ我等の

様る者ハ周圍八方ニ發現る事の原因をバ知ずして長旅の旅人を見ニ様ニ萬有の中ニ徘徊て居るものドや　ソコデ　此萬有の作用を穿鑿して撿査する人ハ事々物々の道理も知り諸の現象を透觀て其人の周圍ニ何事か發現やうニ決して驚きもせねども我等るどが不意ニ襲れて其道理を發明みんぞ時ニハその事が我等を怪ませて種々様々の迷ひ信仰の導となるものドや車の軸材の事にしても一昨日より昨日まで乾燥ニ天色ニ夜前の暴雨を添加へニ事が何うるし小其現象の原因ドやぞい　ソレ　見よ想像の妖怪でも悪魔鬼神の所為でも化の皮が見ゆるハ

「ドーシ　然し旦那それハ如何様る事でござりまれう　アノ　男共の大勢が昨日の夕方成就し得るんぞ事が　アレガ　今でハ巳自と發現ニ事でござりまんうや　デモ　會得のいうぬと

「旦　ソウヂヤ　客人　凡萬有の作用と云ものハ極々の想像の力と打越ものドや　チヨツト　思て見よ水の氷と成時ハ何るらバ破裂まいう平日見る陶器や硝子の壺か破裂るのをみるふほまど〳〵重き厚き硬き物が破裂るぞい或とき大瓶ニ十分水を満て口を密閉であつニところが沍寒ニ由て片々ふ破裂たことがいつニ萬有の中ニ日々發現る百千の事もちやうど車の軸材の事の様ニ領會のいうぬもの

で汝等の為にハ同様に不思議に見ゆるものなれども
慣習と云ことがそれを考へしめずに唯非常な事が汝等を
怪まするのミぢや思索て見れバ萬事萬物がキット心を用
ふべきのミならず淺學の輩にハ不思議に見ゆるものなれども世間が一ッもそれに氣を付ぬ。モノ、コロ汝の種る草木
に光明の大利害ある事に、チヨット意を認て見ると不思議
に見えぬ事ハ何があるぞい今此事を引用て見れバ陽日
にある草木の葉ハ青々としてあるに光のなき窖に入て
あつた草木の葉ハ何の理で黄色になるものか萬事萬物
が皆この様なものぢや「トインホン＝左様でござりまするヨ

旦那萬事を左様に考へて見ますれバ時々發現る事にも
ヤツパリ不思議がござりまするヨ私も去年時分庖厨の牀の下
にあつた雨桶が大暴雨て片々に破裂て牀を押揚ました
私の稽古にして見ました水がマアあの様な力を持
とハドウシテ出来る者でござりますか「旦サ其事でも諸
の他の事でも萬有學と名くる學問が教るぞよ此學問ハ
眼前に發現て不思議なる事の道理を汝に教るのミならず
極高上の現象を見る様に其道理の解りかねハされども
慣習に由てのミ氣の付ぬ平生の事の道理をも亦教るぞ
よ言て見れバ喞筒の中の水ハ何の理で吸子に從ふぞ桶

の上が密閉てあると何の理で酒が嘴孔から流れぬぞ手から投出れた球ハ何の理で向に行ぞ亦何の理で物ハ上から下に落るぞ此純實る事件をどれぞ一ッ考へたことがあるか

「トイン イヽヱ旦那決してござりませぬ私がそれを考へましたとてちやうど車の軸材の已自と嵌入だもの様に何も道理の辨ることハござりませぬ○ケレモ旦那尊主の心揣でもして○タダ今名を知せて下さつた學問をバ私も稽古いたして見たいと云好心が攪動されまして其學問でならバ私も萬事の道理を知ことが出来ませうかとも思ひまするが私づれでハ些少ばかりでも習ひ取ことハ出来難い○ト云様な事ハござりまいか尊主もまた私に割つ砕つして諭して下さる程まで深切にハ思召ぬでもござりませうがどふした者でござりませうぞ

「旦乃公ハ左様な事を好で為たが然し○ドウ始た者でならうぞ汝ハ隨分工夫ハ達者にある○ケレ氏此學問に關る事ハ何も知ぬ又此學問ハ難解もので殘りなく知うと思ふれバ○マア一本立の學業でなるぞよ○チヤニヨツテ汝にハ先此官府から出板になつた庠校格致問答を與へて讀せるでもならう○トハイウモノノ此本ハ大抵總ての萬有學と具備て此學を根本から知うと思ふ庠校の蒙師衆や書生等の為に適當して書物じやま

思無邪齋藏

依て恐くハ其事件が汝でハ十分に領會が行まいと思ふ。然しながら汝のその褒美もすべき價ある好の志を無に為ぬ様に乃公が一ッ萬有學の一端をバ解易き式に誌め得るか得ぬかを試て汝の胸臆に合當か合當ぬか次第々々に講て見るであらうが其時にハ汝ハ極々の工夫をこらして聽聞せねばならぬぞよ。サテ講釋を為す時分に汝が理會でなんど事もむつかしうならバ論ずるとハ勝手次第を免すぞよ亦此彼の事に就て尚又明亮に了解ん為に難問する事が發現す時も同く勝手氣侭を免すぞよ又論辨しする事件を得道しす時分に類似たる發現事などを時々汝が

説話するのを聞なうぞ乃公ハマア喜悦であらうと思ふぞよ「トイン　その良善な思召でハ真實ありがたい恩惠でござりまする私が學問稽古の為に尊主が諭して下さらう事ハ何事でも理會いたす様に私も私だけハ張込まするでござりませう「ガモウハヤ私ハ利益を得た様な意思がいたしまする「且　然らバ明晩乃公が側に来い。その時我等が始まを為でからうが汝の極肝要なる為にハ唯萬有學の一端を教るのであるならバ日々發現る事も如何ほど容易く明かになるものか又種々の迷ひ信仰の心も如何ぞかを退くものか始終證據立をして汝に見するであらうぞ

に「トイレ」その時ハ私ハ直に車の軸材で發現る事から講釋を聴でござりませう○アノ事ハまず私にハ不思議にござりまして何も事ハ辨りませぬ「且」汝が聞であらう○ケレトモ講釋を分明に得道する為に先乃公が前以の學問を汝に領會させねバならぬ此學問に於ハ別して階梯を登る様に進まねバならぬ○デナケレバ真實の事を知ずして何もわからぬ様の理會をするものドや○マア堅固で暮せ

○約束の晩になつたところで學齋の「トイレマニ」も益に在て旦那が第一回の講釋を始めし

○第一回の講釋

○大凡地にもあれ天にもあれ空氣の中にもあれ我等を圍繞てある事件ハ皆自然萬有と名くるぞ○ツマリ天地の中に發現る事ハ皆萬有の作用である其作用や事件を辨知を萬有學と名く○モノ、コ、ロ今雨が降る其雨降るが萬有の作用であるぞ○サテ萬有の中の此雨ハ如何様にして産出る何から成立り等と云ことを識るが萬有學の部中に入るぞよ

○是等の作用を辨知にハ如何様に事を為ものぞと云バ實に唯精密に考諮る事と撿査する事のミドや抑萬事萬

物何もかも萬有學家に逃匿をるものもる也ぞよ。萬有學家ハ何でも那でも心を認て極些少の現象なりとも精密に意を用ひねバならぬ。然し幾百萬の物件や數量なき現象の中にでハ何を始るでおらうか我等ハまづ那個に工夫を定るでおらうか。樹木に心を認るものであらうか硝子や水や火や光や又ハ空氣や雲に心を認たものでおらうか。是の如き物件ハ全く數量なきものじや。我等ハ道路を變て此全天地を一團にし大凡に透觀ねばならぬ。百萬の物件が我等をバ圍繞ているが各個々にハ皆互に異ているけれども此と彼とを比較てみれバ

皆が素質（物の有者ハそな「ストフ」なり）の大小によらば形體であつて視ることも出来摑むことも出来て長さにも廣さにも厚さにも如何程かの大さがあつて彼と此とに強いか弱いか亢打る力があつて互に雜入ぬ性質が有をハ何もかも同様じや。ナゼトイフニ若是等の事が無としてそれなれバ我等の外に發現る事を知でもあらうものか言てみれバ我等の周圍の物件をバ視たり聽たり嗅ざり味たり觸たりしてそれがソコニ在と云ことを知じや。ナゼナレバ此識官（視聽嗅味觸の五官）を持ぬ人倫ハ自身が世界に在ことをも知まいであらうがじや。然し此視る聽嗅味に觸ると云ことハ如何様にして出来るぞと云バ如

何程僅微にあらうか悉く其素質の所為の充打と感動と
に由て出来るものじや○モノゴヽロ我等が聴ときハ常に我等
の周圍に在て風と名くる者を發起る空氣の素質が我等
の耳底に抵抗るのじや又見ときハ我等が視る物からの
光が刺衝つゝ眼の内に纔入来るをちやうど食物の舌を
刺衝て芬香ある蒸發氣の鼻を刺衝ると同事で感觸ハま
さ十分に素質の充打力を知しむるぞよ○ガ恐くハ汝が此
空氣の中にふまれして在程の微塵の素質が○ノ如何程
の充打を為ものか又如何程も廣さ厚さが有ものか○ト思
ふでもあらうがそれが甚僅微にして意外に微小にある

（思無邪齋藏）

をあつても○ドノ様にあつても其素質も○キツト物じやぞよ○
ニヨツテ汝が殊に心を認ねばならぬとぞ○我等が現在に視さ
ず觸たりする物に就てならずハ論せずして我等の眼力
がまづく幾倍か強く有さり或ハ最上の顕微鏡が有たり
して視るでもあらう物じやの又ハ我等の感覺が至極敏
精なつて○實に萬有の中に在べき物と想像し時に觸覺る
でもあらう物までを論ずることじやぞよ○サテ素質ハ亦如
何程微小にあらうか無形素質ハ無ものじや○モノゴヽロ素質
の側てハ砂粒が高山と見ゆるほど微小なる素質でも○無
形素質でハあるハせぬぞよ○素質でさへなきに必如何程

ろの亢抒を為ものじや。ソコテ汝が大き物にて發現る事ハ總て其對稱で小さ物にも發現ると云ことを。一定の規則とせねハならぬぞよ今茲に極平坦る板二枚の間に微小る塵が搾られさと。チヨツト譬て考へてミよ必その微塵の所在の那地ハ此板が互に全く附着ことの出来ねとハ實に當然に有べきのことじや。がそれが附着て有り無りハ我等がそれを視ることハ能ハぬ。ケレ圧大き物から小き物に推及してそれバ。キツトそれがサウ有ねバならぬことが知る。今チヨツト豌豆を取て汝の拇指と食指との間に摘えてみよ。其時ハその豆を摘んだ處の那地ハ。かるらバ拇指と食指とが互

思無邪齋藏

に附着ことハ出来まいが。是ハ汝が視ることが出来るぞよ。今コデ一粒の小砂を取てそれをまさ拇指と食指との間に固く摘えてみよ。幾何倍りハ小けれども汝が豆を摘んだとちやうど同ことじやと領會をるてあらうがな。サテ其指の間の砂粒が汝の摘んで居る那地に於てハ拇指と食指との附着ことを障て指ハ只其周圍だけ附着て砂粒の所在の那地ハ附着ぬぞよ。サテソコデ此砂粒がまざく千倍も小く有ても亦ちやうど同ことじやと云ことハ。キツト汝も理會が出来る。が茲に萬有の中に大さのない素質が出現さとチヨツト想像てミよ若然らハそれハ物とそれが何で有でな

らうら實ハ當然ニ無者じや○ナゼ」バ大さが無れバまさ居
場所も不用にして決して知こともも能ねバ觸こともも能ね
デ是物ハ有者でかるいぞよ抑素質と云者ハ如何程微小
にしても砂粒より百萬倍微小にしても如何程かハ
キット大さが有ものじや○ソコデ我等の周圍に在て萬有の素
質と成如何程かの大さの有ものハ皆其大さの為に如何
程か亢抒をる力が有て長さも廣さも厚さも具備て有ぞ
よ○サテ形状ハ如何様にならうか如何様に大からうか小
からうそれハ同ことじやに依て如何程かの大さが有て
亢抒を為力さへ具たる者なれバ皆之を體と名くるぞ○ソ

コデ此全天地が亦體から成立て其體が皆互に動作て總て
萬有の現象を發起るものじや○サレバ極大き岩石も眼に見
られざる小分子（凡體も微小なる者の集りて成る故に分てバ分るゝなれ故に體中の微小なる素質を指て分子と云なり）の空氣となり風となる者も花類から臭に飛
來る小分子も體であり○我等が住居する土地も體であり
其土地の成立と諸の素質も亦各個々に體であるぞよ○モ
コヽロを言バ我等の體じやの馬の體じやの牛の體じやの
草木の體じやの蔓蘿の體じやの砂粒の體じやのと云様
なるものじや○サテ此體にハ元来雜入ぬ性質と名けらる亢
抒力が有ねバならず又極微小なる者にも如何程かの大さ

が有て長さ廣さ厚さが有ねバならぬと云をハ我等が既
に知しぞよ。が此両様の固有性なくてハ萬有の中に出来
立ものハ無でもあらう。なぜと云に此固有性なけれバ我
等の識官でハ知ことが出来ねでからうからじや。そこで世
間に一ツの體も體でならで外表に侵されぬ又人々の識
官ハ體の素質よりも他の物ハ外表にて知ぬと云ぞよ。な
ぜとなれど今チヨツト素質の所為でもなく體の所為でもなき
外表の感覺を想像てみよ何事が發現ねバならぬもの
か若然る時ハ耳じやの眼じやのと云ものが止ことを得ば
丸抒もなく大さもなく觸合もせぬ人の識官を刺衝もせ

ぬ物で侵されねぞるならバ畧して言バ元来無者で侵され
ねバならぬかぶじや。そこで是物ハ觸られもせば知れもせ
ぬじやに依て个様な物の有と無との間にハ區別をすると
も不用であるあらう。が然し幾多か集りても重さを知と
能もぬ程微小なる素質をバ我等が萬有の中に發明て其
素質をバ秤量られぬ素質と名けしをハ真實じや即ち光
明じやの温煖じやのと云様な者で實體ある素質でハ有
ても實ハこれを秤量て見る器械を持ぬまでじや
○茲まで乃公が言し事を汝が得道しさならバ。ゲカア證據
立をやらふぞよ「トイン」ヘ且那解し事もあるで解ぬ事もあり。

全く明白にハござりませぬ。實に見も聞も慣ぬ事でその
もんでござりませぬ。然し次でハ随分得道するでござりま
せう「且ヤイ客人。ソレハいかぬ。次でハ随分得道するであらう
サアとを言。ナニをドや。汝が此第一の基礎と成事を理會
せぬなれバ向に進むをハなりませぬが。今見えさとかも此基
礎と成事に滞りが有ても可也なるとも事を理會
させバにハ向に行をハならぬが。サテ世話しいを。ドウ志
さな良うらう。コーツと。オハレ茲に焼石を持て居る。ナヲ之を
見よ。サ此石が長もないか。廣ハないか。厚ハないか。實に有
うがな。ヨレカ。今乃公がその長さ廣さをバ。ドウシテ知りと云で。

觸たり視さしして知のドや。ヨレカ。今まさ此石を極細末に
磨砕けバ。此石の素質毎が亦必如何程かの大さが有て長
さ廣さ厚さも有るでなからうぞよ。ヨレカ。完全の石を見さ時
の様に。その長さ廣さをバ明白に視ることを能えぬえ。實に能
そぬドや。ケレドそれが無者にハ成果ぬぞよ。ナゼナレバ我等が眼
を顕微鏡にて扶けて見ると。随分其小分子の各個くの長
さ廣さ厚さをば明白に視ることが出来るからドや。サテ此
微小なる素質がまるく千倍の千倍も微小にて有ても同く長
さ廣さ厚さハ有うからに。其微小分子を極初素質と名くる
ドや。ソコデ人倫や活物が加そりたる全天地をバ。素質世界

と名くるぞよ○此微小素質ハ如何程小からうか全かアヽ
時の石の様に亦必如何程かの硬さが有ねバならぬ○ソユテ
亦如何程僅微にても亢抗力が有ねバならぬ○ナゼナレバ○タツタ今
言し如く是事が無とされバ○其素質ハ無者で有かふじや○
サレバ考晳的の本然ハ何事ぞと云ぞ○凡素質底に有ぬ者ハ
皆外表の識官ある人倫でハ○知を能ぬぬと云ことを會得し
て居るが○極肝要と思ぬむならぬぞよ○が今チヨツト汝の眼を
瞑れ○ソシテ汝の手を以て其机に觸きぬぶりて机に觸る「且
今汝が何ぞを覺るか「トイ「ヘ」これえ机ドやと覺まする「且
然らバ汝ハ何を以て机ドやと知る「トイ」何を以ての那を

以てのと云理ハござりませぬ○私がこれを觸るか知まい
にのドや「且」實に左様ドや○その机が汝の手に亢抗を為の
ドや○ソコデ汝がそれを覺る○がもちつとの間瞑てをれよ○今
一ッ他の事を試で「トインマシが顔を煽ぐ○と云て且那が自身の笠を脱其今又汝が物を
覺るか「トイ」「ヘイ」且那私の顔にフーウト風の抵るを覺まに「且
汝が今その風を覺るとハ○ドウシタ理かと云バ○實にその風が
無者でハ有ぬして○實體ある素質で有との道理からでる
ドや○此素質ハ空氣と名くる者にして○ちやうど魚ども
が水の中に住居してある様に○我等も常に此空氣の中に
生活運動して住るがゆゑ○この素質の至極の透明て○視るとこ

そ能えね又意外ニ微小ニハ有ども此空氣素質をバ乃公が笠を以て汝の顔ニ當て打付さ。ソコデ其小分子の丸打カが汝の皮膚ニ風の感覺を為さのじや。サテ茲で向を行ふぞ。今乃公が机に觸えせバニ那處ニ机が立て在ことを知のハ。ドウ云理かい。トンそれハ言でも知ことを尊主が那處ニ立て居る机を觀覽なさるのじや。「且ナルホド視るかと云を乃公ハ隨分知て居るが。汝ハ何の理でアレヲ視るか。汝が机を觸し時ニハ汝の手ニ抵て著明かつさ。が今でハどふじやナ。これハ汝がヨウ辨るまい。乃公がそれを言て聞さう。最前汝が手を以て机を觸さ乃公が笠で煽ざしニ依て汝

が空氣を覺させると同様ニ今でハ汝の眼を以て机を觸るのじや。然し是ハ一層微妙ニして著明かならぬ事で光と名くる素質の媒ニ由てじや。この光と云者ハ唯眼ニぞか覺る程精微なる者で。光明を視る時ニ太甚眼を傷しむる。眼病人で證據が知。又も久しく暗處ニ在て後。ヒヨツト明處ニ出た人ニて證據が知る程の者じや。サテ此光素質〔次ニ光素と云者ハ此光素質のことなり〕ハ燈火から火芒を發る樣ニ。總て視る所の者から我等の眼ニ輝き来つて。其視る物を眼中ニ画像て其光の刺衝るのが眼の内で其物件を觸しむる。是を我等が視ると名くる。ソコデ何もかも皆觸であるぞよ。若

手を以てか又ハ他の粗朴な部分を以て觸り能はぬ時ハ。眼じやの耳じやの舌じやの鼻じやのと云一層精微にして柔軟なる者を以て觸るじや。ガ元來我等にハ感覺と云一ツの識官が有て。此感覺ハ全體に布滿てゐる者じや。ガ手や足や又ハ全身の皮膚にハ。此感覺最粗朴して唯顕著な亢打をなれ。粗大な分子を知のみは適當して微小分子も元素も知とハ能ハぬ。ケレド舌に於ハ此感覺甚精微にして食物の刺衝分子を覺て手に著うしかうざる者を試むる。鼻に於ハ此感覺又復強くして他の者でハ覺もせぬ著るくもなき花類や草木の精微なる蒸發氣を嗅で覺え。

耳に於ハ空氣の震動を覺え眼に於ハ此感覺の強さて視ると名くる光の作用をも十全に知程に精微にあるぞよ「トイン然し旦那無者ハ見も能はねど聞も能はねぬ見聞するなれど素質で以て體で有ねバなうぬと云てハ當然じやと適度私が理會しさとむ不有ものなれど。マダ問ねバなうぬ事がでざまれ何の理で私ハ アノ 蔭影を見まにの。此ハ キツト 無者でハござりませぬうや「且 ナルホド 客人ヨ。蔭影と云者ハ手を以てハ觸るとも能ハぬ摑むとも能ハねど手にハ随分無者じや然し感覺にハ キツト 有ぞよ。マ暑中の旱暵にハ家の蔭影でハ外の處より熱が少ないのを

著るく覺ハせぬり「ドイン ヘイ」且那炎暑の陽日でハ誰がマア蔭影を好ミまいり「且」然らハ蔭影ハ著明ハるいり我等が眼でも著明ハるいり實ニ有うが然し如何の理り乃公がそれを言て聞さう日輪の光が直ニ達ぬドや不由て其蔭の處ニハ光が少く抵ると覺るぞ是元来以前に覺さ物をバ今で覺ぬのドや眼を以て蔭影を見る時もちやうど同ぞで以前ニハ眼が物を見て今でハ眼が其物を見ぬドや那地ニハ欠處を知ぞよ乃公が照明てある白布を見るれ那處ニ光を障碍る偶人り又ハ他の物を置バ總ての處ハ白く有まがら其物を置さ

る處ふ光を奪ハるゝぞよ此時蔭影を現ち光の欠處を覺ゑ同時ふ光と光の欠處とを知ドやサバ蔭影ハ直行ニ進む光暉をバ障碍る所の體が那處ふ在ことを知しむる故に兼て明白ニ諸體の亢打を示れぞよ

○證據立

○此實理の次序ニてハ何事を說明をべきと云バ次の事が切實ドや此實理ニ由バ諸の素質ニハ何の為ニて亢打力ニ當ると云道理を知のことるとぞ尚又水ハ何の為ニて大船を障へ保つて其上ニ浮べると云道理をもきり又その外でハ風となる空氣素質ハ急疾ニ走まバ其亢打

力で吹抵り毛髪や輕衣を背後ニ飛揚らしむるハ如何ニと云道理も志り。大風と名くる強劇き流動ニてハ。家屋や樹木等をバ遠方ニ吹飛を態ニもあるハ。何故と云ことも志ず又空虚なる壷を直倒にして水ニ没入れバ。何故ニ水が入ぬぞと云バ。眼ニこそ見えぬ壷の内ニ在る空氣が。その充打力で昇り上る水を障るからドや。が是等の事をアゲ冗長に擧て聞もるも詮の無ことドやニ依て茲ハ是までにして舍て尚又汝ニ思念せねバならぬ事ハ。如何程微小ニても素質ハ皆體で有て。如何程かの大さか有と勘弁してをれハ。大き體ハ小き體の夥多から成立て。其小き體の

夥多が大き體を爲と。如何ニと云ことも自から辨ると云事ドや若微小の素質ニ大さが有なんどならバ。是事ハ出来ぬでもなからうぞよ。ナゼナレバ全く大さのなき物ハ百萬を積集ても其積集り物も亦同く大さが無でなからうからドや「トイン」尊主の講釋を聴聞いされ中ニ素質でもなく體でもなき者ハ。見も聞も能ハぬと云所ハ。全くサウドやと考へました。が然つてみると。アノ幽霊を見たり聞たりもるとハ。ドウシテ出来ますのか。是事ハ誰も私を拄ざ付て否む者もござりませぬ。他人の話でなれバ私も言ふとハ思ませぬけれど。私が自身ニ見聞しことで詰まもる。が是事ハ。キ

ド私が證據でござりません「且ハテ番頭汝が自身に幽霊を見たと聞しが、ソレハ恐怯りつしてであらう。乃公も一度ハ見たことが有たと思ふたが、それハ手續がナ。乃公に話てきかせい「トイレ私が若年の時分ハ弗村と云處の緑菜農夫の佃奴でござりましたが、私の家ハ村中で寺の墓所の極近邊にござりまして、村の鐘を打のハ聞程にござりました。私の寝所ハ樓上でござりまして、其窓から覗まれバ寺の墓ハ眼下に透見る處でござりましたが、私ハ大の寐坊で平常ハ無までござりませんが、一夜目が寤たとがござりまして八ッの鐘を聞ました。

ソコデ復一息安睡と思ひましたところに何事が有たと申せバ、寺の墓所にザハザハと大勢の人が行列をる様る音を聞ませんのドや。コレハ怪異事と思ひ起立て窓から覗きましたれバ、明亮として葬禮の行のを見ました。シテ其葬禮をる人ハ黒き衣服やるどの代りに皆が長き白襦衣を着てをりました。ソコデ私が恐さも恐さに倒れ轉ひ震慄るがうに蒲團の内に這込まして、傘にまして復寝睡ましたが、益にまご一ツ不思議るをハ何事りと申せバ、夜分に私が覗ました所の窓ハ内にハ硝子の障子が建て外にハ木の雨戸が建てござりませんのドや。ソレニ翌朝私が覺寤た時分にハ其雨戸

が全く閉てござりました。ガ私が前夜にそれを閉たのか。
閉たのかハ更に思ひ出ハ得ませぬ。ソレ聞た事での話
でハなく自身の發明と云ことが知ませうが。ナ、且又私が實
に覺寤てゐつたとハ、八ッを聞た鐘が證據でござりました
「且　汝も側に袖珎時規を持て居たか　「トイ、その時
分にハ私ハまだ。左様る冨人でハござりませなんだ。ナレ
是式の事に無をハ造り立ませぬ。袖珎時規ハ持ぬでも。イ
デモ寺の鐘を聞きれたのサ　「且　然ドバ汝が其見た物
をバ非常の者ドやと思ふたのハ。一ッも異むに足る事でハ
ないが。凡左様な妖怪見る説話ハ其事るどよりまぶしく　勝

れたのも有が。乃公も若袖珎時規が扶てくれなんだなら
ば一度ハ惑に陥たでもゐろうト思ふぞよ。其事を一ッ汝
に話て聞さう。乃公が書生の時分にハ甚鐘樓に近き所の
表部屋に住居して居たが。ちやうど汝の様に夜半時分に
目が寤て。七ッの鐘を聞たのと。トタの拍子に大足でノウレノウレ
と歩む物が。乃公が部屋の樺子を登て夜分に閑れバ決し
て開閉をせぬ中戸をバ開るのを聞た。ガ是ハ何ドや何物
ドやと見分ても見ぬ者が。乃公が寝床の前に来て今ざに
耳に覺て居る様る大きな聲で乃公に向て一口二口言を
云て。復立帰て己が跡の戸を閉て最前登た時と同様の大

足に歩行て。再びノツソリノツソリと梯子を降つたが。乃公もちやう
ど汝の様に震恐て。眞氣に復までにも　マア四半時よりも
長かつた。然し乃公が事件を考稽にかゝると其侭此事ハ
何事で有たであらうかと。檢査をする為に勇氣を復故して。
是も亦夢で有たでハあるまいか。ト吾自己に乃公が考ふ
るが。中〳〵夢でねへ。乃公が思し様にハ。ソレがいかぬ。ナゼナレバ鐘
と聞ものゝじやに依て。實に覺寤て有たかどや。然しな
がら乃公が又其上を考稽にかゝつて。鐘の鳴たのも何も
かも夢でハないか。ト思ひ付と其侭寢床から飛出て。乃公
が袖珍時規を取て。如何程の夜深になつたかと窓に向て

清明る月の光で見られど。サ七ツ時でハなしに九ツ時を過て
暫時であつた。ソコデ鐘が七ツを打るんどとが分明に知た。ケ
此時規ハ。セモソレ動輙バ止留ものじやに依て。唯袖珍時規ばかりのこ
ハ委せれ。鐘を聞て尚切實に時刻を究んかされ。一時許
も坐て居た。此時袖珍時規と同時刻に鐘が鳴た。ソコデ乃公
が幸にして此も彼も何もかもを夢見たとを知て。是ハ想像
の遊であつて。眞實の事でハ有るんぞを發明した。此時
の袖珍時規ハ。乃公に夢見たとを究した。大切る藥劑で
あつた。ガ汝のハ明亮としたそであつたかい。ナア其間て
居た雨戸の汝てさへ不思議かつたのが。汝が那處から覗

ばして此も彼も全く夢じやと云ことを分明に知せハせる
んだが夫や凡世間の妖怪話の汝が見る様な類ハ總て其様
なもので説話をする人ハ皆自身に見たと云じやが素質で
なき者を我等の素質の眼で見ると云ことハ實に出来ぬと
で。ダ今汝に知せたとおりじや。ニヨッテ是等の事ハ此人倫
世界にハなきことで。我等の識官でハ決して知ことハ能ぬ抑
素質でなき者ハ觸ることも能ハぬから真實素質である者を。
見たり聞たりすることハ全く出来ぬぞよ。ナゼナレバ前にも汝に
示したごとく視ことも聞ことも亦觸りじやに依て。ソコデ素質で
なき者ハ我等ハ見も能ねバ聞も能ねバ何でも素質で

なしに成立ものハ皆想像の事のみであるじや。デナケレバ夢に
起因る事か巧妙なる觀場か或ハ亦暗處か月の光かに
て吾自己に造為た怪像のことじやぞよ乃公が朋友の中の
或人が左様なものを若年の時に見たことがあつた。この男
が朧月の宵に寺の墓所を通行て寺の角を廻る時分に頭
に角持たものが寺の硝子鏡に映るのを見た。それをこの
男が何物とも知ずして忽ち逃出した然るに其時の迷ひ
心からに鬼じやと思ふた其物がこの男を追駈た。ソコデこの
男甚恐怯がつて。何處を歩行か足の蹈場も知ず向見ずに
走りて翌日死骸を葬らん為に堀て有た死人穴に落て首

ざけ見ゆるり見えぬり位に没入し是時妖怪がしとい
ふ聲して己が姿を顕しされバ。それが大野羊で有ことが
知れ此野羊ハ寺の壁に向て己の影を見て其影を刺んと
して飛付されど影の動揺を覚さに依て己れ同士の敵に
逢し様に思ふて其影に走り付きのであつた。我等
が若非常のものを見る時其の原因を明むる為にハ
天地の中にハ萬有の外のことハ發現ぬと云ことを能信用し
て意を用ひて撿査せねハならぬぞよ汝が次で知であら
う様に凹面鏡ドやの幻術手燭ドやの光彩假面等の様な
人倫の術でをる事ハ遥に勝さもので其他のことハ總て罔

章さる想像の所為でなるり夢の營為であるり又ハ半覺
さる態のをであるドやその事ハ所謂魘不寤の病ある輩
が證據とするぞよ「トイン且那。魘不寤話でござりまに
り私も相應に患ひましたが。恐怯い困迫ものでご
ざりまれ「且那」番頭汝も知て居るり然ドハ汝ハ何ドや
とをるぞ「トイン」何ドやとをるぞ且那。私ハ知ませぬ。
「ハソレ」夜間までりり見えて人の胴體に乗る白馬でござり
まれもの人の話のありの侭ふ白馬なドと申して尊主
がお笑なさるでなからうかふ。知ぬと言さがました。そ
れが何であらうり那でなからうり。棄置て私が能知

ましてハ私の胴體ニ物が來て咽喉を搾ることを明亮と覺
えましたが妾を限の力を出しても中々助るハ得ませなん
だ。大骨折をいたした後に幸に轉臥まれると其侭ソ
レが何處へやら退て事が過去てしまひました「且其魘不
窹と名くる病證ハ乃公が若年の時ニハ度々患ふたが或
時ハ汝が詰れ様なことを覺る時もあり又或時ハ燃る家の
内ニ居るの様なことを覺る時もあり又或ハ兇首りに襲
る様なこと或ハ高き塔の上に立て壁を傳て降りねバる
らぬ様なことを覺る時もあつて始終恐怯さ困迫さで事が
畢るが是事が多分ハ初聽ニあるじやニ依て。好き看侍人

があつて乃公が寢る時ニハ一時程寢牀の前ニ坐て居て。
精密ニ乃公に氣を付て居る。ソコデ病患の起る後ニ覺窹て
りし今乃公か苦しさを助りらん為ニハ。如何程恐怯く鬪
たり汝がソレを見ハせるんだりと看侍人ニ問されど乃公
が覺窹る時分ニ困迫聲を舉て轉臥さまでハ。死ぬ様ニ靜
にして居ると答る。ソレバ醫者衆の一定の説で觀れバ。魘不
窹と云病ハ。大食して胃腑が膨張さふもせよ。多量の風氣
があつて膨張さニもせよ。大血脉ニ胃腑の押壓て起る所の
恐怯く困重き夢であつて其胃腑の押壓ので。大き血脉の
有る胸部や咽喉ニ困迫を覺さして重き物が上ニ在て咽

唯を搾ると想像る一種の夢を起そとゆるぞよ。ソコデ亦臨
卧ニ服用さる駆風剤が此病證を防ぐのハ其原因ニ由を
ドや「トイニー」左様でござりまするか私が真實と思ま
したことが真實で有ものか無ものか實ニ疑惑が起て
まゐりまするが然て見ると。アノ事ハ夢で有てもござり
ませうが人倫と云ものハ何で マア 自己を欺まするかナ
然し旦那事を全く會得いたしませぬか。まず物を問
まするが悪い奴といい思召る私が女し得道いたした時分ニ。
幻術手燭でドやの凹面鏡でドやの。ソレニまざ何やらが
有さ様なが。オハン光彩假面でドやの幽灵を現れとお話る

さつさが願でござりまするか。ナヨット言て下され此品物ハ如何
る者でござりまするか亦事をドう為まその。アノ幻術手
燭とやらハ私も一度らハ見ましたが。アレハ白壁や綿布ニ
當ての影像の觀場でござりまして一ツも幽灵か現れこと
ハ思ゐませるんざ其他の品物ハ私ハ。ツイド見さとがござ
りませぬ「且 尋常の式で幻術手燭を觀場するのを見て。
汝が恐怯いものも見ば幽灵らしきものを見るんざと云
ことハ乃公も甚信用するぞよ。ナキレバ汝がそれを見する人
と手燭とを知て居さらぶドや。然し チヨット汝が黒暗る部屋
の内ニあつて其部屋の内ニハ汝の知て居る者の他ニ別

の部屋に出入をる戸か窓かあつて其出入口にハ綿布を張て幻術手燭を持さる人が其綿布の後の別の部屋に在て汝が其人でも幻術手燭でも何でもかでも知ぬ様にして居ることを想像てみよ。サテ又その人が此手燭を以諸人が魂魄とも思ひるゝ様な白い影像を現して。その手燭を動ものて其影像を大めさり小めさりそるとちやうど其影像が遠方から汝に近寄さか又ハスーツト土地から昇り出さかの様に見えことを想像てみよ。且又その人が綿布の代りに「ウィーローク」（假國にて燒香にふる脂の名）の煙を拵へて此煙の中に其影像を現しさまらバ尚惡心あるでもあらう。汝

にハ何と考へる。是も亦幽霊と名くるでもあるまいか。又光彩假面と云ものハ遠方から見れバ實物ドやと思ふ様に當然に画さる人倫の顔の悲哀あり忿怒ある面色の画像であるぞよ。此假面の後にハ燈火を伏置さる手燭かあつてその燈火の前にハ瞬目をる間に消失さしさり出現さしたりそる為の戸扉がある。サテ世間が真暗暗てあつて此物が何處から来きるのか知そもなく考へも能ハぬに、ヒヨツト一度現れさ時にハ、マア汝て推量してとれバ汝ハ物を恐きぬ大勇者てあいわハなるまいぞよ「トイン」ヘイ明白に解ましさが。然つてゐると左様な假面ハ少しハ推

剣假面に似てゐらねバなりませぬ。ナゼと申せバ眼じやの鼻じやの口じやの歯じやのと云ものを彫付て其内に小い蠟燭を立てござりますから遠方から見ますれバ全く死人の首に似てござりますからじや。が然し凹面鏡とハ如何様なものでござりまするぞ。又それを以てハ如何様な事を為しますのか「且汝の其推剣假面の譬諭ハ實に光彩假面と一様である。が凹面鏡とハ如何様なものぞ。ト云尋にハまだ茲で汝に言ことが出来ぬ。此事ハまだ後に幻術手燭の事に就て態とも言ことの序があるであらう。ヨツテ茲で汝に言をハ凹面鏡ハ綿布なしに何もない處の場處

に不意に見當る程明白に見をることを云のことじや尋常の鏡にて汝が知とおり我等の姿の影像の鏡の後に現るゝと見るものじやに依て凹面鏡にてハ全く鏡の前の外の處に見えて何の掛り碍りもなく獨でに現る様に見ゆるからじや。が汝でハ何と考へるか。實に是ハ幽灵に似たるのでハないかい「實でござりまする旦那。然しまだ他の事を問ますが悪とハ思召な願でござりまれ。チヨツト言て下され旦那。アノ交感散と云ものハ如何様なものでござりますぞ度々私ハ話に聞ましたマヅ申してそれバ劇き緘血が出る時分に其血の一滴を此散薬の上

に落しましきで出る血が忽ち止まるぞや又人が物を偷みし時分には其盗人の汗の付し物を手に入て此散薬を加へて煎まけるとその盗人が偷だ物をバ再持来て返さねバならぬ様に窘められまけじや「且汝が目前にそれを見さる「トイ、イーエ度々説話に聞ましと「且サラカ左様な談話い價直がない。世の中の迷ひ信者などハ種々無量の馬鹿なことを思ひても。が彼此説話にさへあることなれぞ何も那も汝ハ信用せうと思ふが抑微小なる素質分子ハ互に如何様如何程までも作用を營むと云こと我等が知ぬことも真實で。ソコテ何が素質の作用の有べきことを知ぬとも真實じや。ニッテ無者ハ乃公も知ぬぞよ。然るに此字義の通りなれぞ素質でなき者の交感のことに由こそじや。若然らざれぞ互に觸合こともなしに目にも見えぐ隠伏さる式にて相共に作用を營むでもあらう所の體と體との親しや。が前方既に汝に示しさる基礎の理にてそれも此事ハ出来ぬことで全く有べきことでハないぞよ。ソコデアノ基礎の理に原けバ盗人の汗の付たる什器に其散薬を加へて煎て盗人を捕へて悪事を糾明をる術ハ我等ハ唯信用されぬ馬鹿な事をなるのことなどに全く出来ぬ事で虚偽とをるじや。が是とちやうど同ことで「ハーゲ」地名と云處に交感療治の業を

思無邪齋藏

する人が有ても、ヤツパリ虚偽じやと云ことを知ぞよ此人に服薬を用ひずして病苦を助くると云て諸人に信用させし人でゐつても此人の居場所が如何程の道程を隔てゐようが亦如何様な事であらうが此人に書簡を付て肝要なる金銀を贈れバ病苦の癒ると眼前にあると思ひ込せし人でゐつたが近年でハ所謂追従軽薄をする輩でさへも此文明な世の中に恥て左様な者の談話にハ相手になるものしやサレバ其卑隷などが毎々非常に己が病患を話し廻ることハ實事でゐるが其事件が如何様なことぞと云バ詑宣じやの墨色じやの家相じやのと云者と同ことで希に一

度がハ迷ひ信者などを甚不思議がらせる程適中ことも有れどそれがトウ云手續になる者ぞと云バ左様な事件を撿査する人じやの又ハ何も那も間違と言せる人などハ自身に此事を為ことを恥て人の誹謗を恐るゝ故に人にも話さぬが亦其事が何も格別の大事を惹起さぬものじやから速に忘るゝじや然しながら僥倖にて多少助を受た所の一人か二人かゞ奇妙不思議と思ひこんで其事の大切なことを寒心するものじやに依て人々毎に話し廻るじや又病證を種々に書挙てゐると病身にゐる人などハ何事かハ覺當ることがあるものじやが實でないぞよ

客人「アノ妖怪でも汝の思ふ様な交感でも、マア氣つかいなれ有ことでもあるいじや然しながら次の處で知であらう通りに此萬有が物體で以て十分に不思議を營むのハ、我々等が萬有の外の作用と思ふとも叶ぬ程のことじやぞよ、がその散藥が汝の言とほりの作用を營んだことが實事であつた時に、チヨツト汝が思案してみやうのハ度々盜人を捕ることが出来るでもあらうし、血が出る時も此散藥より他の藥ハ用ふることもいるまいと云ことじや、ナゼナレバ此交感散ハ甚顕然なるものにして皓礬の一味で出来てあるからじや

○此度ハ旦那が茲までにして止置けるに「トイレマレ」ハ前方知ざりし萬有の學問を既已學ひ得たりと思ひし故に小首傾け工夫しつゝ滿足して己が家に帰りけり

○工夫を積に随ひて好學の志益に起り立ち故に又其先の教を聞んが爲に取ものも採敢ず再旦那に伺候したり是の如く學問に志あるを旦那の心に適るをハ言でも知たことじやに依て「トイレマレ」が講釋を願ふと其侭旦那が第二回の講釋を始めし

○第二回の講釋

○既に知るが如く凡萬有の中の物體ハ如何程に大きくとも亦如何程に小さくとも。イツデモ長さ廣さ厚さがあつて。其長さ廣さ厚さがまさしく物體の形を成と云をハ真實じや。ソコデ總ての物體が一定の形を持てあらねバならぬ。ソコデ亦草木の類を區別することがあつて椎の葉や柳の葉をもつて比ぶれバ。イツデモよく菩提樹の葉を知分ることもあるじや。草木藥草の學問も此形に係るものじや。サテ此基礎の事にて進まうぞ

○茲に石勃卒（和名「ウヱワタ」松浦海濱「ウヱザウラ」漢名石勃卒蘭名「スポンス」と云其形竹綿の様なるもあり。綿の類の様なるものにて。高野豆腐を見たる様に。孔穴がありて能水などを吸こむものなり）あるを見よ此石勃卒も亦其机じやの汝の體じやの乃公の體じやの一様に一種の體であるじや。が然し此體ハ如何なる程鬆疎く組織てあるものぞ。チヨツト見よ那處も這處も満面に穴じや。サテこの石勃卒にて満面に見ゆる鍼眼の如き小穴をバ剥林と名くるじや。コトハイヘ唯石勃卒ばかりでなく萬有の中にありとしある物體がちやうど石勃卒の如く満面に剥林のみであるじや。抑推積合集て物體を集成に所の素質小分子ハ。左程まで緻密にハ決して合并ハ能ぬ。假令緻密に合并ても其穴が亦如何程に小さく

うとも互の中間ニハ必微小の剥林があるて極平滑しき金ニしても極研磨さる銀ニしても満面が剥林でなつて素質の本體よりハ剥林の容積が多き程のものぢやガ研磨さる石や鋼や銀や金やなどの様なものに其剥林を目ニかゝらぬのハ畢竟ハ我等の眼ニ罪がある〇ナゼナレバ顯微鏡の助で以て此等の物を視る時ハ甚分明ニ其剥林を見ることが出来るからぢや〇サレバ焼石があるのを見よ〇此石が乍ち夥數の剥林を見せうぞや〇サ今此石をバ水を汲さる桶ニ沈むるぞ〇能氣を付てチヨツト聞よ〇ナゼニ此石がシーンくと鳴るピーイくと鳴ぞ〇是ハ此石の剥林の中ニ滲入所の水と最前剥林の中ニ在る空氣（空氣ハ極て精微なるもの故ニ物體の中ニハどこもかも充塞てあるぞ）の交代して〇那處から浮ひ出るのとより他ニハ何があると思ふぞや〇其水の上ニ浮びあがる微小の氣球にて明白ぢや

〇人身の皮膚ニも百億萬の剥林があるぢや〇是ハ我等の身體の中の殘餘物と〇汗や蒸氣ニて發出ル所の幾多の脉管などの端末であるが〇此處よりハ大小便の道ニてよりも多分を泄せるものぢや〇平常病なき状態ニてハ〇二十四時の間ニ一封度と四分一封度の三を蒸發するものぢや〇ガ流動物（水油諸の汁液及び空氣の如き流るゝ物ハ皆流動物といふ）ニも亦此剥林があ

ること甚明白になるじやナゼナレバ此流動物の彼流動物に滲入
交るからじや又雜卵の殼にも剝林があるのハ汚悪もの
を蒸發して伏嫗を催進る爲とするじやが此剝林と云も
のが天地の中に幾許の現象を起れじやに依て他の事の
講釋に進む前に先第で一ツ二ツの證據立を擧るでなからう
が能是に氣を付て居れよ

○證據立

○剝林のあることに依て新しく造作さる板細工ものが屈
曲たり牽縮たり破裂たりすることがある是ハ板の剝林に
在る水分子と空氣とが温熱にて膨張て其膨張るので材

木の纖維を他形になし極度に至りて破裂しむるのじや
ソコデ戸や窓や抽斗やなどの開閉が時として困難なことが
ある是も濕氣ある空氣が其剝林に滿面水分子を引しむ
れバ亦自から材木が膨張てその膨張るので開閉が困難
くなるのじやジヤニヨツテ乾破さる桶などにハ其剝林に滿面
水分子を引しむれバ材木分子の膨張るので復び緊合る
ぞよガ是の如く幾度も膨張たり縮小だりすることを防
ぐにハ油脂じやの画料じやの漆じやのを以て材木の剝林
を塞ぐのが甚餘義なきことであるじやソコデ我等も板細工
ものを畫漆することハ極て肝要のことであると云ことを學知

ドや
○甚重き物に乾燥さる縄を結び着て緊張る様にして置ところで○其縄を濕して膨張らしたるバ○其重き物を容易く牽揚るであらうぞや○乾燥さる木の楔子を臼石に打込で其楔子を濕せて○今様る石の大なる類も両片に分ることが出来るぞよ○ガ是にハ材木が其剝林に劇く水を引揚る所の引の力と云ものが亦目的に添ねバならぬドや○ソコデ亦茲でハ能乾燥さる縄が○何故で車の軸材を引揚しぞと云道理も知るドや○サバアノ天色の乾暵さ時分に車の軸材に結び着し縄が○其軸材を軸穴に嵌入んが為に緊しく

牽つめられてゐつさ○ソレニ其夜の暴雨が縄を濕して○其縄の剝林に満面水を引しめたのに○縄ハヤツパリ緊しく牽つめられてゐつさ○ソコデ其乾燥さ縄が雨を吸入て○其吸入をを百千萬の縄分子が營むので○縄が劇く膨張ながつて○ソレデその車の軸材が○究も劇く打込れとかの様に○自から穴に嵌入む程までに短縮さのドや○チヤニヨツテ汝等をバ甚しく怪ませし所の現象が發現されども○その事が甚天然自然のことでゐつさのドや○ガ此引力や吸入ハ如何様る者ぞと云こハ次で汝ふ示にであらう
○我等の身體の剝林より不斷蒸氣の出るのハ○研磨さる

鋼に手をもつて觸るれバ○假令其手が能乾燥てありとも○いツデモ汚濁との原因じやぞよ

○雞卵ハ卵殻の剥林から蛋質の中に浸入る所の空氣にて腐敗るものじやに依て其殻に「フルニス」〔漆の如きもの〕を塗て全く剥林を塞ぐ時ハ○その腐敗を防ぐことが出来るぞよ○が此事ハ「アラヒヤコム」を焼酒に溶して○其液を雞卵に塗も十分じや○且又二十四時の二倍程○上好蕪菁の油に雞卵を漬て置ても○其油ハ殻内の白皮に通徹こともなく○僅の味ひを卵蛋に傳染こともなく○唯其殻にのみ滲付て此事が出来るじや○サレバ卵殻に幾多の剥林があることハ○厳醋に浸出さりし没食子と明礬とにて拵へさる液をもつて○蛋白を破開ことなしに唯其殻に文字を書て○尚二三日塩水か醋かに漬置のことにて煎卵子の内の蛋白に其文字の寫る時に明白に知るじや○又諸の物體にある剥林の驚異べく夥數あることが所謂交感墨の現象を起すぞや○が此事を為んとならバ○水に溶したる鉛糖の液をもつて文字を書よ○此文字ハ目に見えざる然して其書しものをバ大抵に厚き書籍の前に置よ○又その最後の紙をバ「リクオルプロパトリユス」と云名●液をもつて塗よ○是の如くにして置時ハ○空氣素質の様にして此液より發出る微小の分子が書籍の數百枚の剥林をバ

滲透るでありますぞよ。其書籍をバ搾器に掛さへすれ
ば前に置し見えざる文字が甚顕著くなるでありますぞ
「トイン是ハ實に不思議にござりまするに然てみると其小分子
ハ如何程なる精微なるものでござりまするぞ「且實に甚
精微なるものよ然しなが此萬有の中にハまだ〱精微なる
素質が有ねばならぬと云ことが汝にも次第〱に分明になる
であらうぞ
○不意して原因が穿鑿されぬ音のパチリと云を聞ことあれ
ば左様なことハ家族の中に死亡のある前表ぢやと云ことを
信用せし輩を屢見るが是ハ前に説示したる理にてみれ

ば因り物體の刹林にありて不斷に材木を屈曲しめ時と
してハ劇く膨張るので其纖維を破裂しめて劇き音を起
す所の水と空氣とより他にハ何も然るべき者ハないと
云ことが明かに知るぢや甚天然自然の原因がある事件
とハ雖どもその原因を穿鑿し能ハぬので迷ひ信者など
が萬有の外の事とするのぢやぞよ乃公が朋友の中の或
人がその朋友や家族と共に同部屋に在し時皆人ともに
不意に魂飛て躍り揚しほど劇き音響を聞て茲を限りに
驚かされし此時諸人とも益もなく周圍八方を環視せし
に其中の一人が延縮する板を装置て中央の扱ハ「マホ子

イ」板の縁の間まで蠟巾を以て被覆たる○飯臺が立し所の隅の方から○其聲の來た樣なるを記たと思ふので○其處を默見しさまが○その布巾が二裂に綻たのを見て○次に其板が中央から破たのを見た○ソコデその恐怯き音響ハ○何物が起發たと云ことを知たのじや「トイン左樣る不意ぬ音響にて知せらるゝ○前表の事ハ○私も度々聞ました○が怖きハ唯剥林ばかりで出來る者でござりませうが○亦それ程の水や空氣が其裏に在者でござりませうか○何ぞ マア 其他の物が陰の方に潜匿て居て○所為をするのでハござりますまいか「且いまざに汝ハ全く萬有學樣にハ事件を觀察

ぬり材木のみり鐵にしても世の中にあまとしかる極硬き物體でさへも○ちやうど石勃卒の樣に満面に穴があつて○真實のところが素質よりも剥林が多分にあるのじや○が我等が其剥林を目にかゝらぬのハ○唯それが甚細小にして○其細小なる理から視神の為に顕著からぬのことで有ども○その細小さの理でハ亦甚彩數くあるのじや○ソコデ空氣や水が其中に滲入とも出來るぞよ○が空氣や水蒸氣が膨張るのも如何程でかマ劇裂き者と云とハ○汝も次で能知であらうぞ○サレバ竈に張付たる鐵の板が裂聲を為たり○強く火を燃た時ニハ屡破裂たりするのも○亦同道理の為であ

るぞよ○抑材木と云ものハ何の苦もなく劇く破裂ものじ
やが○その破裂ので恐怯き音響を發をのミならず或ハ屈
曲たり或ハ全く割裂さるゝ時ハ畫漆を剥脱さる障子
の鏡を剖折て百千の片塊ニして落しさるゝことがあつて○
或ハ又強く緊張る幕などを破綻こともあるが○總て是の如
き現象ハ同原因のとで此も彼も聊前表を爲のでハない
ぞよ○今汝が聞たとおり是の如き原因なしニハ萬有の中
ニハ何も發現ぬものじやからぞ○此皆の事の原因ハ甚天然
自然のとじや○只時としてハ此原因を直ニ發明ハ能もぬ
じやケレド原因がないと云證據ハなるいぞよ○ナゼナレバ凡大然

自然なる現象の原因ハ○時ニハ久くして後ニ初て發明し○
時ニハ其原因の甚伏藏てあり或ハ顯著き兆候を残さぬ
ことがあり○但僅微の裂縫を殘る所の引縮れる空氣の發裂
しより由り○蒸氣の發裂しろニ由て○音響を起せし
時にある若然しされた全く穿鑿せぬから○又ハ變違の場處
を穿鑿をるからドヤ○萬有學家ハ萬事萬物を撿査
して其性質や道理や状態を學知ねバならぬぞよ○が此要
件に就てハ其天然自然のとが○尚又明かなる所の彼此を
次ニ於て解であらうからぞ○今此講釋をバ他の事ニ移でなら
うぞよ
○凡物體ハ分子から集合る者として考察ぞニハ一ツも想

像を為ことが出来ぬじや。サテ其分子と云ハ前方の論に由
と互の間に剥林を積容て。其剥林のあるので片々れ割解
るゝ所のものじや。ソコデ物體ハ總てこゝろ差別なく割碎く
とが出来て茲を限りの想像も及ぬ所の微小にまで割解
るゝので。其微小を考へてゐると全く心が消失る程にあ
るじや。モノハコヽロ材木の一片を極々精微なる細末となして
も。其細末の各個の素質がまだ〳〵精微に割解るゝじや。ナ
ゼナレバその細末ハ如何程精微になりてを。イツデモまだ材木で
あるじやに依て。他に分離術様にして火の作用で割解を
が出来ることじや即ち是術を用れバその細末が。炎とる

れ小分子となり。其他にハ煙となりてまた其
他にハ灰や塩などの小分子を残を様に剖解ることじや
○水の中に満地に溶解て多量の水を。其色に添る所の色
料の剖解るとふ注意さり。又ハ那處も這處も散満る花や。
草木の芬香の小分子に注意さり。殊にハ又一年の久しさ
も室中に馨香き小分子を充満て。假令其室の空氣を代換
てを乍ち僕新にその小分子を充塞る所の麝香に注意て
こよ。介様に育たところが極精密なる秤に掛ても目に見
ゆる重さが損をハないぞや。がそれを考てゐると。マア失
魂がをる様るぞナア。とハ云ものゝ賢才明智にして名譽

ある萬有學家の「レーウエンフーク」と云人が「カベリヤーワ」（魚の名）の精臓の中に砂粒より千倍も微小き夥多の虫を發明されしのを目的に立てゝ見ると是等ハまぶしく無者でハならねども　サテ亦それに此虫の身體が運動べき所の關節とも接合てゐると思惟てミよ然る時ハ我等の想像ハモハヤそてふ限りで及もないドや然るに此星天から分れ来て小き照星孔を通貫り画板に映りて星天の大なる部分を著明なるし眼の内に画く所の光素の微小を思考てミると實に我等の心が素質の無限無量き微小に亡失るぞや　サレバ此素質ハ無量にまで剖解べきものか又ハ其剖解るとが定のあるものか又ハ一ッも剥林が無してもそや剖解られぬ所の第一番の根元素質にて止るものか此素質世界の界限と云ものハ全く了簡の外なるものじやに依てそれを知ことが出来ぬじや　トハイヘ物ノ無量く剖解るものときまれば　チトモ道理の休息場處が有ずして此素質世界ハ全く無極になるものじやに依て茲に極硬して剥林なく亦如何様なる力を用ひても剖解る能ぬ根元素質（後に元素と称ものハ此根元素質のことなり）が有と云ことを定るのが我等の極りある才智の為にハ甚辨ド易くして考へ易きことであるじや「ドイシ」然し旦那その微小のことハ實にハ信用しがたきことかとも思ひ

まそる砂粒より千倍も微小き虫がゐますぞ○其虫ハまだ頭
や手足を具へませうし○なりとしあれバ亦眼じやの臓腑
じやのと具へませうが○それが何處までふ出来る者
でござりませうぞ○ヘイ實ニ有ますかい ナア○ちやうどマ
ア無者の様な器物でござりますぞ ナア「且コ」客人何で
それが出来ましであらうぞ○亦汝ニハ何で信用がされく
ひぞ○介様ニ微小なる虫や分子などを○目ニうつくしくふだニ無
者とするのハ○唯我等の粗朴き感覚と眼たのミ適ハぬと○
云ことを度々汝ニ言しのを○チヨツト工夫ニうけてみよ○ダセニトナレバ
汝が若「レーウエンフーク」の顕微鏡の様な強き眼を持しま

かで○此人の見かれしとおりニ汝も亦左様な虫を見るで
とおうふし○種々微小の素質まで見るでもあらうかぶ
や○ガ茲ニ或國に人がおつて○其國人の裸眼でハ豌豆の大
さある物なふでハ○何も視るとハ能ハざりし程の粗朴き
識官を持しと云ことを○チヨツト想像てもよ○若然るときハ是國
人ニハ芥子種が○ドウシテ驚く程の微小ニ見えまいである
うが左もなくぞ是國人などニハ○芥子種ハ全く見えざり
しものじや○ソコデ是國人などが芥子種の形容何うを視よ
うと思ふニえ○強き顕微鏡を用意するでもあらうぞよ○然
るに汝ニして○ハ芥子種ハ甚見易くして○まざく微小な塵

でさへも視得るのでハないか然し亦何處にぞ我等の識官より甚しく精微に過感覺に過る識官を持て〇レーウェンフークの虫を裸眼で視し者が一人でもあるであらうか〇ソレヂヤニヨツテ精微粗朴と云者ハ我等の識官に關係るものじやぞよ〇サバ田犬やなどの様な者ハ野獣の足跡に随ひて〇ソコニ其野獣が居ることを嗅出すものじやうが其嗅所の識官が幾多程精微に過感覺に過ると云ことと〇ハヤ我等が學知じや〇ガ是等の事を以て考てミれバ我等の識官ハ彼田犬などよて感覺の少ないのが至智至善のことであるじや〇若我等の眼がいまに増大て見えしならバ萬有が其美容

を失亡ていさましく見ゆるでとあらうし今でハ見えぬ百億萬の虫などが顯出て我等を恐懼らせでもいじとノぞや又耳の聞が今よて強らバ撫愛所の箏琴などの妙音が我等の耳に雷鳴のなる様にもいうし嗅ことが精微に過たらバ今でハ斯までに快よき玫瑰や白芷などの馨香が強劇して堪がたき程にいるでもあらうぞ〇ガ今が十分ぞや萬事萬物が至智至善の恰好じや只此素質と云者ハ如何ばかり精微にある者ぞと工夫を遂ぬのハ那地にハ想像が為れぬうぶじや〇サテ此先に進む前に僕一ツ二ツの證擬立を致さうぞよ

〇證據立

〇素質分子の微小なることを考てみれバ〇犬ハ何の理で早く遠方の野獣と知ぞと云ことの理會が出来るじや〇是ハ其野獣が蒸發して土地に着し足跡に残る所の想像も及バぬ微小の分子が〇犬の鼻の中に入て〇その非常の感覺ある嗅神經を侵すのじや〔神經と云者ハ〇活物の體中にある白き絡にして〇物毎を知分る者なり〇詳かにハ醫書にて知るべし〕

〇疊積さる衣服の中の疫熱の素質ハ〇一年の久しきも籠てあつて〇其衣服を放開ときハ復新に病を發すハ〇何が為と云道理も亦同じことであるぞ〇ナゼニトナレバ凡傳染と云ことハ〇空氣を傳ひ飛散て人の呼吸に吸入るゝか〇又ハ皮膚の剥林にて吸入るゝ所の甚微小なる素質分子から發としてならでハ他にハ説を定ることが能ぬからじや〇是理に依て此素質もちやうど香氣ある薬液か〇又ハ他の物の様に硝子壜や草袋の中に貯ることが出来るぞ〇ソコデそれが貯られさ間ハ〇その臭氣を知ことハなけれども〇其硝子壜や草袋を放開ときハ〇忽その臭氣を覺る程にあるじや

〇凡物體を剖解ときハ當然に其外面が廣る者じや〇一寸の高さと一寸の幅とある骰子石をみれバ〇其外面ハ各一寸づゝの六方である〇ソコデ外面が六寸あるじや〇今此

骰子石の六方面を竪横に割剖バ五分方づゝの八個が出来るゾ其一方面毎が一寸方の四分の一となるゾや○サテ此八個の骰子石には四十八方面があって四十八の四分一ハ外面十二寸である。○ヂャニヨッテ一度剖解ときにハヤ一倍となるゾや次第にまして剖解ゆけバその外面が次第に廣くなるぞよ

○凡物體ハ外面の廣けれバ廣きかど空氣に抗りて摩擦とが愈強くなるゾや○ソコデ單丸が同重量の層彈を裝さるのよりも甚遠方に達のハ是理に由ることゾや

○對稱にされど小児の空氣にて墜ることを大人よりも強き

のも亦右の原因に由ることゾや○又骨喜（細末にして傷をうけ 茶の揉にして用ふる）豆の（各名）や其他氣味を泡出にする品物ハ○磨碎て細末にされバ完全の者よりも○らく氣味を出すの道理を右の理にて知れるゾや○サテ又小き體ハ大き體よりも早く寒冷なるをハ何故ぞと云バ○其大さの對稱にされど冷る為の外面が多くして空氣に觸ることのことゾや○ガ是等の理を理會するにハ○マヅ是で十分ゾや

○今又萬有自然の性質の堪急力（以下堪急力と記せる者ハ此堪急力のことなり）と云る者を論ぞかゝらうぞ

○凡物體ハ一タび静止たる状態となれる時ハ○外来の原因

なるてそれを劫脅をとるけきハ再その状態を變易ぬ所の性質を堪力と云ドや　ソコデ物體ハ一ツでも自身から動揺ものハ无く其原因が目に見ゆるにもせよ見えぬにもせよ　イツテモ他の物にて其動く道路に援助を受ねバならぬものドや　サレバ燃上る焔硝の劇甚き力にて銃丸の飛行さし毬を打たりする時の様な物體が他の物にて衝動さるゝ時ハ其原因が目に見ゆるドや　ケレドモ我等が心意の所為にて事を思ふ時にハ原因が見えぬドや　モノハ、コヽロ腕肱を揚る時にハ心意が神經に作用をなせむ　其神經が筋（筋とハ世に云脈絡）の（事にならバ赤き肉のことな　詳かなハ留書にて知べし）を感ぜしむること其筋の心意

の條に随ひて腕肱を揚る様な工合にするのドや　赤物が風ふて動かさるゝ時ドやの重力にて下に落る時やるどハ其原因が見えふくいドや

○右の理に依てみれバ運動力（後に動力と云ふハ是なり）と名くる性質が有と云ことに自考へ當るドや　サレバ物體ハ大かぶうか小かぶうか其堪力に勝る力があるか或ハその移動の障碍に勝る力があつて劫脅をと其條必動揺ねばならぬと云をハ些少思惟てみると目前に解ることドや　ソコデ星の天にてと空氣の中にても土地の上にても萬事萬物が皆運動の中にゐるドや　若此運動が無ものなれバ天地ハ成長する

く變化もなく生活をなき頑固の死塊であるてもあらうぞ萬有學の基本によれバ萬有ハ活物で天地の中に運動をすると云る諺ハ此理に由ことドや

○凡物體の一度動揺かゝるをうれバ彼此の障碍にてそれを止めて体静しむるに非ざれバ決して動揺ハ止ぬものドや手から投出れし球ドやの大礟から射出さし彈丸などが向に進て行ところで夫の重力が有たり空氣の抗抵が有たもしるそれを土地に落をことが無ならバ其投出し射出をし形に直線に進て幾萬里の限りもなく幾萬年も体止ことなしに同速力にて飛行でもあらうぞよ

「トイ」コレハ旦那ソノ大切なる事件までを私に稽古さして下さりましたガ私ドやの私が様な輩などハ中々考へ當りもいたしませぬ左様な教諭を受ませぬならバ私などがそれを知ませうぞいガ私ハ其理を知たさぞうアで願ひましたが尊主が此度の講釋でまづ其上に彼此明かに示して下さることが出来ませうか「且」サテ客人まで些少なりと證據立にして言でハなからう能氣を付て聴聞せよや

○證據立

○物體の堪力と動力との理にてこれぞ人が急速に走行

く終りなハ何の為で瞬時間ヌ其向方に止まり能えぬぞと云道理が解るドや是ハ始終向に進まんとする勢の傾が休静ならんとする力と反對であるからドやソコデ走る人が瞬時間ヌ走を止ることが出来ぬぞよ亦是と同く始終進まんとする勢の傾の為ヌ馬ハもちや曳止ても牽舟が進行のハ此動力と堪力との理ヌ由ことドや是時若水が次第くヌ舟を止めて休静しめぬものならハ舟ハ必何處までを進行ではからうぞよ又大風が吹と後ヌ暫時間ハ海が劇く波動てあるのを同道理の為であるドや

○此證據立の目的を説聞せて且那と「トイレマ」との第二回の集會ハ終にけり此時且那ハ物々の性質のことに就て己れが教諭を理會する様ヌ都合よく言聞せんと思ひ「トイレマ」ハ實ヌ己れの學術が進歩て工夫を回らすヌ至らバ是理ヌよりて切實なる利益を惹得でもあらうと思ひ且又物毎に好もせズ嫌ともなくしてうつらくと日を送る多くの輩よりハ早く萬有學の緊要を知り亦甚大切なる學問までを知でもあらうと悦ばしき見渡をぞ付にける

思無邪齋藏

民間格致問答巻之一終